



# 山西っ子

《なかよく・かしこく・たくましく》



人影？ 夕刻の運動場で、先生方がダンスの打合せ。運動会に向け、先生方も頑張っておられます。

令和2年9月17日(木) no.23 文責：上田

## 対話を通して知識をつなぐ

ある学級の通信で紹介された子どもの作文です。

学校帰りに動物の足あとを見つけたこと

五年 すどう颯太郎

きのう九月八日にイノシシの足あとがありました。

ゆうき君が、

「これ、動物の足あとじゃない。」

と言いました。ぼくも近づいて見ました。

すると、二本指の六センチメートルぐら

いの足あとが道の横のふかふかの土の上

にありました。

ぼくは、

「イノシシじゃない。」

と言いました。ゆうき君が、

「たぶんそうだよ。」

と言いました。ぼくは、

「夜、イノシシ来てるんじゃない。」

と言いました。この場所は、冬にやまと君

がサルの足あとを見つけた場所です。こ

こには、いろいろな動物が来てるんだな

と思いました。

ぼくたちは、歩き始めて、家に帰りまし



作者の子は、この作文を書く前に担任に動物の足あとを見つけた出来事をうれしそうに話したそうです。担任は話を聞いてとても楽しかったので、その子に作文に書くように促したと通信には書かれていました。担任と子どもとの楽しそうな会話から生まれた作文という点ですばらしいと思います。

さらに、この作文からはいくつもの大切なことをうかがい知ることができます。

その一つが、子どもが友達や先生との対話を通して別々の具体的な知識をもとに、言葉を駆使して多くの知識や情報をつなげ、認識の質を高めているということです。「イノシシの足あと？」→(2本指の6センチの足あと)(道の横のふかふかの土の上)→「イノシシじゃない?」「たぶんそうだ」・・・⇒「夜、イノシシが来る?」・・・⇒(この場所は、やまと君がサルの足あとを見つけた場所)・・・⇒(いろいろな動物が来る)と、知識が何層にも重なり構造化されたようです。

知識は(あの時に学んだ)(あの場面でもやった)(今回の場面も同じだ)などの気づきや感覚から場面や状況とつながり、ついには使える知識になります。担任にうれしそうに話したという経験とともに、知識としての深まっていることが察せられます。また、子どもたちの日常の体験は話すことや書くことでより豊かになることにも気づかされます。